

そこで、イエスは言われた。「神の国は何に似ているか。何にたとえようか。それは、からし種に似ている。人がこれを取って庭に蒔くと、成長して木になり、その枝には空の鳥が巣を作る。」また言われた。「神の国を何にたとえようか。パン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨らむ。」（ルカ13：18～21）

主イエスは、「神の国は何に似ているか。何にたとえようか」と語り始められた。「神の国」とは、神の愛と真実が実現し、人は互いに愛し合い、生きる喜びを共有している世界である。それは、抽象的な世界ではなく、現実の世界として存在する。主イエスは神の国を現わすために遣わされ、この一事に心を傾けておられた。その「神の国はからし種に似ている」と言われる。人がからし種を取って庭に蒔くと、大きく成長し、鳥が巣を作るほどになる。からし種の実は、下の写真のように小さい。胡麻の10分の1ほどである。植えると、ラッパ型をした黄色い美しい花をつける。そして、木に成長すると、数メートルにもなり、鳥が来て巣を作れる。神の国は、からし種のように小さいが、成長すると、空の鳥が巣を作り、宿るほど大きくなると譬えられた。

また、神の国は「パン種に似ている」と言われた。女がパン種を粉に混ぜると、全体が膨らむ。そのように、神の国は、小さなパン種が全体を膨らませるように、大きくなると譬えられた。パン種は、悪しき譬えとして用いられることが多い。ルカ福音書12章1節Cに「ファリサイ派の人々のパン種、すなわち、彼らの偽善に注意しなさい」と書いて、彼らの偽善がパン種のように膨らむと警告している。パウロもIコリント書5章8節で「だから、古いパン種や悪意と邪悪のパン種を用いなくて、パン種が入っていない純粋で真実なパンで祭りを祝おうではありませんか」と書いている。パン種を悪意と邪悪と見なしている。この認識には歴史的な経緯がある。エジプトで奴隷だったイスラエルは出エジプトをする。その時、イスラエル人は、種なしのパンを食べて脱出し、旅路でも種なしのパンを焼いて食べた。これを記念して、過越祭では、種が入っていないパンを、聖なるパンと位置づけ、食べることにしている。著者ルカは、従来の理解から外れ、パン種を、神の国の成長に譬え、極めて、珍しい使い方をしている。

主イエスが宣教された「神の国」、からし種、パン種は、当時、時代を支配していたローマ帝国から見れば、ガリラヤという辺鄙な片隅で蒔かれた種である。しかし、その神の国は、今や、世界中に広がり、クリスチャン人口は、33%、25億人と言われている。パウロは狂気のように、主イエスの福音を宣教したが、これほど、大きく成長するとは思っていなかったのではないか。からし種は大木となり、パン種は大きく膨らんだ。しかし今、大きく成長した神の国の内実が、主イエスが示された福音にふさわしいものであるかどうか、自らの信仰を問い直すことが求められているのではないか。



からし種の実



からし種の花



からし種の木